C 62

ニューヨーク、パリ、東京の台所設備と食生活　その1

東京ガス（株）都市生活研究所　○馬場きよみ　大久保窓香　藤井哲哉

〔目的〕戦後、40数年たち我が国の食生活、台所空間は大きく変わった。本調査はニューヨーク、パリ、東京の3都市の台所設備とその使用状況、食生活実態を調査、比較することにより、その相違点と共通性を探り、東京の家庭生活における食生活の方向を考える資料にすることを目的とする。

〔方法〕①家庭訪問調査；調査時期1989年9月　ニューヨーク11件、パリ10件の家庭に事前に簡単なアンケート用紙を郵送、その回収と訪問ヒアリングを行なった。②アンケート調査；調査時期1989年11月　ニューヨーク 500人、パリ 500人に電話によるアンケート調査、東京 702人に郵送による質問紙調査を行なった。①②の調査内容は、属性、台所設備と機器の使用状況、食料品の購入、調理食品の利用、外食状況、食生活に関する意識と実態などである。また、①については、キッチン、ダイニングルームの写真撮影も同時に行なった。

〔結果〕設備面では、ニューヨーク、パリ共に独立したダイニングルームがあり、朝晩、平日と週末などで、キッチンの食卓とダイニングルームを使い分ける家が多かった。コンロの口数は、東京の2口に対し4口がほとんどで、オーブンの普及率は高い。電子レンジの普及率はパリ、食器洗浄機は東京が低かった。食生活全般の簡便化、健康志向、食生活の外部化などは、多少の差はあるが3都市共に認められる傾向である。ニューヨーク、パリ共に人を招いて食事をしたり、家族揃って食事をする機会が多く、食事がコミュニケーションの役割を果たし、食生活も含めた生活全体を楽しんでいる様子が感じられた。